# ココラとソコラ

我妻　多賀子

## 一　はじめに

これまで、三年にわたり、この小誌に副詞ココラおよびソコラについて調査した結果を記して来た。まず第二十二号ではココラとその関連語ココダ、ココバについて調べ、この三語は意味・用法上ほとんど差がないこと、ただ時代的には顕著に変わって来ていることを述べた。すなわち、意味的には、これら三つは、いずれも話し手の身近に存在するもの、もしくは話し手に関係の深いものについて数量の多さや程度のはなはだしさを言うことで一致していた。また、用法的には、ココダとココバにはココダク、コキダ、ココバクなど派生した語がいくつか見られたが、ココラには出て来なかった。

次に、時代的に見ると、ココダは上代にのみ存在し、ココバは上代はもとより、派生したココバクとコクバクについては中古でもその例が見られた。そしてココラは中古になって初めて使われ、中世・近世と時代と共にその用例数がしだいに減少して来ていた。したがって、その使用例から推して、これら三語には、ココダ　↓　ココバ　↓　ココラという時代的推移を認めることが出来た。

ところで、右のような変遷は、基幹となるココに付いた接尾語のダが、まずバに、そしてラに変わったとも考えられる。そこで、ココのようなコ系の語ではなく、ソ系の語についてもこの種の現象が見られるのではないかと思って調査してみたのが、以下の号で記した内容になる。すなわち、まず第二十三号では、ココダに相当するソコダが出て来なかったので、関連語のソキダク、そして、ソコバとその派生語ソコバク、ソクバク、ソコソバクなどを取り挙げ、それぞれ通時的な考察を試みた。その結果、量は少ないながらも、接尾語の ダ → バという時代的な移り変わりを認めることは出来た。続いて前号では、ソコラについて調査を進めてみた。ソコラは中古に入ってから盛んに用いられるようになった語であるが、『日本書紀』の古訓にいくつか例が見られ、『万葉集』にはソコラクという一字一音書きの例が出て来るので、すでに上代から存していた語である可能性は大きい。

一方、ソコバも『万葉集』に一字一音書きの例が見られ、上代から使われていた語と言える。そこで、ソコバ、ソコラに関しては、どちらが先に生じたものなのかはっきりしない。また、これらがいつ頃まで使用されていたのかを調べてみると、ソコラは中世、近世の作品でも見え、ソコバについてはソコバそのものこそ中古の初めにその姿を消してしまうが、派生語のソコバク、ソクバクなどはやはり中世、近世の作品にもその例が出て来る。そして『日葡辞書』には、ソコラではなく、ソクバクの方が掲出されている。ということから、ソコ（ク）バクとソコラはどちらが先に使われ始め、また後まで用い続けられたのか判断がつかない。むしろ、両語の違いは、時代的なものではなく、使用ジャンルによるものであろう。すなわち、用例を調べてみると、ソコラは和文系の作品に多く見え、ソコ（ク）バクはほとんどが漢文訓読系の作品で使われている。

したがって、コ系の時には接尾語ダ → バ → ラの移り変わりが認められたが、ソ系の場合、ダの古いことはわかっても、バ、ラについては、どっちが先に生まれたものなのか、文献上からは明確に知り得ないことになる。

以上、これまでに副詞ココラとソコラに関して調査して来たことを大ざっぱに振り返ってみた。ところで、同じ「数の多いこと」「程度のはなはだしいこと」を表す意を有しながら、ココラとソコラの二つが使われていたのはなぜだろうか。そこには、いわゆる代名詞のコ系とソ系の差が見られるのだろうか。今号では、そんな点について、コ系の代表ココラとソ系の代表ソコラの二語だけに焦点を当てて調べてみることにした。以下、はたしてこの二つの語には、意味や用法の上で、何らかの使い分けがあったのかどうかという点を探ってみることにしたい。とりあえずは、数量的に同

じように使われている『源氏物語』の用法から見ていくことにしよう。

## 二　『源氏物語』の用法

『源氏物語』には、ココラが三十八例、ソコラは二十六例使われている。したがて、量的に大差なく、比較考察するには適している。まず初めに、これらが、会話文・心内語・地の文・歌のいずれに使われているのか、その用例数を表に掲げてみることにしたい。

| | ココラ | | ソコラ | |
|---|---|---|---|---|
| 地の文 | 一四 | 三六・八 | 一八 | 六九・二 |
| 会話文 | 一六 | 四二・一 | 六 | 二三・一 |
| 心内語 | 五 | 一三・二 | 二 | 七・七 |
| 歌 | 三 | 七・九 | 0 | 0 |
| 合計 | 三八 | 一00 | 二六 | 一00 |

右は、『源氏物語』に見られるココラとソコラについて、それがどんな種類の文に使われているかを一覧表にしたも

のである。数字はそれぞれ、上が用例数、下は全用例数に対する百分率を示す。

これを見てまず気がつくのは、地の文のソコラが圧倒的に多く、使用率から言っても、ココラの倍近くになっていることである。それに対しココラは、心内語も会話文に準じて考えることが出来るので、半分以上の例が、会話として用いられていることになる。これはつまり、同じように、量の多さや程度のはなはだしさを言ってはいても、ココラの方は、自分の近くに存在するもの、あるいは関係の深いものについていうので、どうしても相手に知らせたり、自分自身が回顧する場面で頻繁に用いられ、必然的に会話文や心内語の例が多くなるのであろう。一方、ソコラは自分も相手も共通に知っていることを示す場面で用いられるので、どちらかというと説明口調になり、地の文の例が多くなっているようである。要するに、截然とした区別があったとは言えないが、使用場所から考えると、ココラは会話文・心内語で、ソコラは地の文で用いられる傾向が強かったということは言えそうである。

なお、会話文において、誰が発した語なのかを調べてみると、ココラの場合は、複数例見えるのが、源氏の六例と鬚黒大将の二例、以下、単数のものは、左大臣、明石の君、薫、大宮、夕霧、尚侍の君、乳母、供人となっている。一方、ソコラの場合の会話の主は、源氏が二例、以下、夕霧、右近、良清、供人と続いている。よって、ココラもソコラも身分、男女に関係なく用いられ、特に使い分けのなかったことがわかる。また、心内語の場合は、ココラが源氏と薫二例、柏木一例、ソコラは明石の御方と女房達が各一例ずつ使われている。総じて、用例数が少ないので、比較するのは難しいが、特別ココラとソコラでこれと言った使い分けはなかったようである。ついでに言うと、ココラの場合にしか出て来ず、本稿とはあまり関係はないが、歌の三例は源氏、薫、明石入道の三人がそれぞれ詠っている。

続いて、全用例について、意味と用法を絡ませながら分類して見て行くことにしたい。まず、意味的には、ココラもソコラもよく似ていて、大きく、「量の多さ」をいうもの（以下、Ⅰとする）と「程度のはなはだしさ」をいうもの（以下、Ⅱとする）の二つに分けて考えることが出来る。このうち、Ⅰは、ココラが三十三例、ソコラは二十例、百分率にすると、各八十六・三％、七十六・九％を占め、ほぼ同率と言える。したがって、ココラ・ソコラともⅡの例は、二十％前後しか使われていないことになる。それでは、Ⅰの方から詳しく見ることにしよう。

ココラもしくはソコラがⅠの意を示すと、形式的にはその半分以上が、下に格助詞のノ、さらにその下に体言を伴った形で使われる。その中でも、下に来る体言が年月日に関するものの場合、ココラとソコラでは明からな使い分けが見

られる。すなわち、この形では、ココラしか用いられず、ソコラには用例が見当たらない。

。（左大臣）「ここらの齢（よはひ）にて、明王の御代、四代をなん見はべりぬれど・・・　＜花宴＞
。親たちはここらの年ごろの祈りのかなふべきを思ひながら・・・　＜明石＞
。ここらの年月住み馴れつる世界を離れて、浮かべる波風に漂ひて、思ひめぐらす方なし。　＜玉鬘＞
。（夕霧）「紫の御用意気色の、ここらの年経ぬれど、ともかくも漏り出で・・・　＜若菜上＞

右のように、年月日に関する語を伴った例が、　ココラではここに記したものも含め全部で九例見られるが、ソコラでは全く使われていない。これは多分、多くの年月日を言う場合、現在を起点として、自分を中心に据えた意識があるので、ソコラではなくココラを用いたものであろう。以下、この形をI－Aとする。

ココラ　＋　格助詞ノ　＋　体言（年月日に関するもの）・・・・・・・・・I－A

次に、ココラやソコラの下に、格助詞ノ、そして体言が来るというI－Aと同じ形でありながら、その体言が「年月日」を言うのではない例が出て来る。以後これらをI－Bとする。この場合、その体言は、ココラ・ソコラとも「人」を指すことが多い。例えばココラでは、直接「人」という語にかかるものが三例、その他、（御）中（大勢ノ方々ノ意）三例、男女・上下と人目が各一例、そして、ソコラでも「人」二例のほか、（御）中一例、親子（みこ）たち、女御后、女房、姫君、御末々（ゴ子孫ノ意）が各一例と、いずれも「人」に関するものにかかっている。

＊。（左大臣ガ）恥ぢ泣き給ふを、ここらの人悲しう見たてまつる。　＜葵＞
。「さやうなる心ばせある人、ここらの中にあらむや。　＜蜻蛉＞
＊。まして女宮たち、女御、更衣、ここらの男女・上下ゆすり満ちて泣きとよむに・・・　＜若菜上＞
。ここらの人目もいと恐ろしくつつましければ・・・　＜若菜上＞

。そこらの人の謗（そし）り、恨みをもはばからせ給はず・・・　　〈桐壺〉
＊。そこらの中にすぐれたる御心ざしもことわりなりけりと・・・　　〈須磨〉
＊。そこらの親子（みこ）たちの御中にすぐれ給へるを・・・　　〈賢木〉
＊。かの御影にたちつぎたまふべき人そこらの御末々にあり難かりけり。　　〈匂宮〉

右に記した例で明らかなように、かかっていく体言が「人」の場合には、ココラとソコラにこれと言った区別が見られない。そして、この事実は調査した底本の例一つ一つについて異文があるかどうかを調べてみると、より一層はっきりとする。すなわち、右に挙げた例のうち、上に＊の印をつけたものはいずれも問題があり、ココラの場合はソコラ、反対にソコラの場合にはココラと書いた異本が存在する。ということは、ココラとソコラに明確な使い分けが見られず、揺れていた証拠となろう。

なお、I－Bの形で、体言が「人」以外のものは左記のように、ココラに一例、ソコラには三例見える。

。ここらの中に〔タクサンアル物語ノ中ニ〕まことはいと少なからむを・・・　　〈螢〉
。そこらの灰の、鬢のわたりにもたちのぼり、よろづの所に満ちたる心地すれば・・・　　〈真木柱〉
。そこらの行ひのしるしにこそはあらめ・・・　　〈若菜上〉
。そこらの御願ひどもみな果たし尽くし給へれども・・・　　〈若菜下〉

右は「物語」「行ひ〔勤行〕」「願ひ」などの抽象的事項から「灰」という具象的なものまで範囲は広いが、ココラにもソコラにもかかって行く例があり、そこにこれといった使い分けは見られない。以上、I－BはI－Aと違い、ココラ、ソコラともに区別なく使われているものと思われる。

コ（ソ）コラ　＋　格助詞ノ　＋　体言（人その他）・・・・・・・・・・I－B

続いて、ココラやソコラが、下に数量の多さを示すアツム（集）、ツドフ（集）という動詞にかかって行く例が出て来る。用例数はココラ、ソコラとも三例ずつで少ないが、以後、こういう形式のものをI－Cとする。

コ(ソ)コラ　＋　アツム、ツドフなど数量の多さを示す動詞・・・・・・・・・・・I－C

。あはれなる空をながめつつ、恨みきこえたまふに、ここら思ひあつめたまへるつらさも消えぬべし。　＜賢木＞
。容貌よきも心あてなるも、ここらあくまで見あつめたまへど・・・　＜宿木＞
。ここらよき人を見集むれど似るべくもあらざりけりとおぼゆ。　＜蜻蛉＞
。そこら集ひ候ふ人の衣の音なひ・・・　＜賢木＞
。そこら集ひたまへるが我も劣らじともてなしたまへる中にも・・・　＜初音＞
。そこら集ひたる響き、おどろおどろしきを・・・　＜御法＞

右の例でわかるように、I－Cの場合、ココラとソコラでは使い方に相違が見られる。つまり、ココラは複合動詞化した思ヒアツム、見アツムという他動詞を伴っているのに対し、ソコラは三例すべてがツドフという単独の自動詞と共に使われている。ココラの最初の例は部分的に「長の年月胸のうちに積もっておいでになった恨めしい思いも」と解釈することが出来、意味的には「年月日」について言っている。あとの二例は「大勢の方を御覧になって来たけれども」「多くの美しい人を見ているけれども」と、両例とも薫のこれまでの言動について述べたところで、ココラは「人」が多いことを言う。また、ソコラの三例はすべて「人」の多さを述べるのに用いている。結局I－Cの場合、ココラは「年月日」と「人」について数量の多さを言うときに用いるが、ソコラはもっぱらその対象が「人」に限られている。また、意味的にもココラはあくまでも自分を中心として、その近辺に多くのものを集める意で他動詞が使われ、ソコラはともかく大勢の者がいるのであれば、自分との距離は関係なく、数の多さのみを強調して、集まっている状態を描写しているものと思われる。そこで、I－Cは先述したI－Aと同じようにココラとソコラに使い分けが見られる用法と言える。次に、これまで述べて来たI－AからI－Cに含まれない用法で、数量の多さを示すものを、とりまとめて

I－Dとする。これは、ココラに十二例、ソコラに五例見える。

コ(ソ)コラ　＋　A・B・C以外の種々の語・・・・・・・・・・I－D

まず、ココラ十二例を見ると、そのうち三分の二に当たる九例は、左に記すいくつかの例で明らかなように結局は「年月日」について述べている。

。男も、ここら世をもてしづめたまふ御心みな乱れて・・・　〈賢木〉
。世をうみにここらしほじむ身となりてなほこの岸をえこそ離れね　〈明石〉
。ここら久しく悩みて、ひきもつくろはぬけはひの・・・　〈総角〉
。ここら年経たまへる御住み処の、いかでか偲びどころなくはあらむ。　〈真木柱〉

右は順に「男〔源氏〕もこれまでの長い年月押しこらえておいでになった恋心が全く乱れて」「〔入道ノ歌〕世の中がつらくて長年海辺で潮気がしみこむ身となっても、やはりまだこの海岸　――　穢土（えど）を厭い離れることが出来ない」「〔大君ノ〕とても長い期間のご病気でお手入れもなさらないありのままのお顔は」「〔鬚黒大将ノ北ノ方ニトッテ〕長い年月をお過ごしなさったお住まいのどうしてなつかしくないことがあるでしょうか」と訳すことが出来、ココラはいずれも年月の多さについて言っている。次に、「人」の多さを言うI－Dのココラは三例出て来る。

。柱隠れにゐ隠れて涙を紛らはしたまへるさま、なほここら見る中にたぐひなかりけりと・・・　〈須磨〉
。「さらにここら見れど御ありさまに似たる人はなかりけり。　〈若菜下〉
。つねなしとここら世を見るうき身だに人の知るまで嘆きやはする　〈蜻蛉〉

これらは解釈すると「〔源氏ガ紫ノ上ノコトヲ〕多くの知っている女の人達の中でも類のない人だったのだ」「私

〔源氏〕は多くの方々に接してきましたが、あなた〔女三宮〕のお人柄に似た方はいませんでした」「〔薫ノ歌〕たくさんの男女の仲を見て来たいとわしいこの身ですが」となり、どれもココラは「人」の多さについて述べている。しかも、注目すべきなのは、その用法が三例ともよく似ていて、必ず動詞「見る」を伴っている。自分を中心とし、自らが実際に経験して来た多くの女性や事例について言っているところなので、やはりここはどうしてもココラを用いて表現すべきところであろう。続いて、ソコラI－Dの五例に関して、まず全用例を左に掲げることにしたい。

。殿の中将の君、内の大殿の君たち、そこらにすぐれてめやすく華やかなり。　＜初音＞
。尚侍（かむ）の君の御近きゆかり、そこらこそは世にひろごりたまへど・・・　＜竹河＞
。そこら大人しき若君達もあまたさまざまにいづれかはわろびたりつる、みなめやすかりつる中に・・・＜竹河＞
。そこらさぶらひたまふ御方々にかかる事なくて年ごろになりにけるを・・・　＜竹河＞
。御調度などはそこらしおかせたまへれば、人々の装束、何くれのはかなきことをぞ急ぎたまふ。　＜竹河＞

ここで特徴的なのは、五例中、四例までが「竹河」の巻に見えることである。また、初めから四例目までは、いずれも「人」の多さについて述べているが、ただ、ココラが主として自らが接した女性について使われていたのに対し、ソコラは男女に関係なく自分とは直接的なつながりが認められない、いわゆる不特定多数の人たちを指している。要するに、同じように大勢であることを表現していても、ココラとソコラには使い分けのあることがわかる。なお、最後の例は「御調度などは前からたくさん準備しておかれたので」と部分的に訳すことが出来、ソコラは「人」でも「年月日」でもない「調度品」、いわば「室内にある手まわりの道具」について、その数の多さを言っている。これはココラでは出て来なかった類の用法になる。ソコラの方がココラに比べて、用法範囲が広いということが言えるかもしれない。

以上、数量の多いことを表すココラとソコラを用法的に、A～Dの四つに分けて考察して来た。引き続いて、程度のはなはだしさを言うIIの例を見ることにしたい。この例は、前にも触れたように、ココラ五例、ソコラ六例とほぼ同数使われ、Iに比べ非常に少ない。まずココラの方から見てみよう。

。「今何の報いにか、ここら横さまなる浪風にはおぼほれたまはむ。　〈明石〉
。「かくおぼつかなながらや、とここら悲しきさまざまの愁はしさはさしおかれて・・・　〈明石〉
。人知れず神のゆるしを待ちし間にここらつれなき世を過ぐすかな　〈朝顔〉
。「ここら思ひしづめつつ過ぐし来るに・・・　〈真木柱〉
。中宮には、宮たちさへあまたここら大人びたまふめるに・・・　〈宿木〉

右の五例は皆ココラを「はなはだしく」とか「たいそう」と訳すことが出来、普通よりも程度が激しい意を表している。また、これらに共通する特徴として、ココラは形容詞（悲し、つれなし）か形容動詞（横さまなり）、あるいは動詞の中でもあまり顕著な動きを伴わないもの（思ひしづむ、大人ぶ）にかかっていると言える。つまり、ココラは状態や様子を示す語にかかって、その程度がはなはだしいことをのべていることになる。次に、IIの意を表すソコラの例を列挙する。

。「そこら遥かにいかめしう占めて造れるさま・・・　〈若紫〉
。こなたかなたの御送りの人ども、寺々の念仏僧など、そこら広き野に所もなし。　〈葵〉
。そこらところせかりし御勢のしづまりて・・・　〈野分〉
。風の吹き舞ふほど、広くそこら高き心地する院に・・・　〈野分〉
。げにそこら心苦しげなることどもを（玉鬘八）とりどりに見しかど・・・　〈真木柱〉
。御調度どもも、そこらの清らをつくし給へるなかにも・・・　〈梅枝〉

これら六例も用法的には、ココラの場合とよく似ている。すなわちソコラは形容詞（広し、ところせし、高し）もしくは形容動詞（遥かなり、心苦しげなり、清らなり）にかかって、その状態のはなはだしさを述べている。以上、IIの意味を表すココラとソコラは、用法上はほとんど差が見られない。ただ、意味的に見ると、特に形容詞や形容動詞が下に来る場合、ココラの方は「悲し」「つれなし」など否定的な感じのするものが多い。反対にソコラの場合は、「真木

柱」の巻の「心苦しげなり」を除くと、あとはみなプラスイメージを与える語ばかりが来ている。〈注1〉　これはつまり、ココラの場合は、自分を中心に、いわゆるウチの世界での程度のはなはだしさを言うので、どうしても内面的、心理的な暗い感じの語が多くなるのかもしれない。一方、ソコラは自分だけでなく、相手も知っている共通場面での程度のはなはだしさを話題にするので、そこには明るくのびのびとした雄大な世界が繰り広げられているような気がする。そのため、「広し」「高し」「遥かなり」などの語には、どうしてもココラではなくソコラがかかって行くのであろう。また、先に挙げたココラの例の中に「思ひしづむ」という動詞にかかるものがある。（「真木柱」の例）これなど「たいそう我慢して過ごして来ましたのに」と解釈出来るので、自分一人心中じっと耐えるという陰気なイメージがつきまとい、まさにソコラではなくココラが上に来ていることで納得が行く。ということで、Ⅱの場合も、ココラ・ソコラ共に、程度が普通よりは強く激しいことを言う副詞として使われてはいるが、意味的にはいくらか使い分けがあったように思われる。

以上、『源氏物語』におけるココラとソコラを取り挙げ、その比較考察を試みて来た。続いて、章を改め、『源氏物語』以外の作品では、ココラとソコラがどのように使われているのかについて見ることにしたい。

## 三　他の作品における用法

『源氏物語』以外の作品における意味・用法はあくまでも前章で述べた内容にのっとり、また時代的には中世までもひっくるめて通時的に述べることにする。

まず、使用場所から言うと、『源氏物語』と同じく、ソコラは大半が地の文で用いられ、ココラは会話文や心内語に多く使われている。また、歌の例は『源氏物語』ではココラに三例出て来ただけだが、他の作品でも同様の傾向が認められる。例えば八代集を見ると、ココラは『古今和歌集』に四例、『後撰和歌集』に二例など、計九例出て来るが、ソコラは一例も用いられていない。といってソコラが歌に全く使われていないというわけではないが、きわめてその用例は少ない。〈注2〉この事実は前にも述べたように、ココラが、自分を中心としてその近辺の量の多さや程度のはなはだしさについて言うので、どうしても相手に語りかける会話文、自分自身心の中でひそかに思う心内語、あるいは心

情吐露の歌などに多く使われるようになるのであろう。一方、ソコラは自分も相手も知っている共通の場面で使用されるので、しぜん説明的な地の文の例が多くなって来るようである。以上、ココラ・ソコラがどういう種類の文に出て来るのか、その使用場所を調べてみたところ、『源氏物語』で見て来たことと、これと言って変わりはなかった。

次に意味・用法を見ると、まず『源氏物語』の時と同じく、「I．量の多さ」、「II．程度のはなはだしさ」の二つに大別出来る。以下、I－A～D、IIの順に用例を挙げながら検証してみることにしたい。

初めに、格助詞ノと「年月日」を示す語が下に来るI－Aは、『源氏物語』ではココラにしか出て来なかったが、他の作品を見ると、ソコラでも使われていないわけではない。

。汝が助けにとて、かた時のほどとて下ししを、そこらの年頃、そこらの金給ひて身をかへたるがごとなりにたり。
＜竹取物語＞

。そこらの月頃をへて、わづらひ給へる人の、かばかり思入りまどはんに・・・　＜浜松中納言物語・五＞

。そこらの年をへて弾きしみたるよりもいまめかしくすみたる音をひきまし給へるに・・・　＜夜の寝覚・一＞

右がその例であるが、これは管見に入る限りのなるべく多くの作品に当たってみた結果、やっと出て来た三例で、確率としては非常に少ない。例えば、I－Aの意を示すものは『宇津保物語』に十二例、『狭衣物語』に七例、『栄花物語』には八例も出て来るが、これらはすべてココラが使われていて、ソコラは見当たらない。また、中世に入っても、少ない用例ながら、I－Aはすべてココラが用いられている。

。ここらの年頃をつくしはてて、かぎりなく貧しくなるままに、あるは男につきて去り、宮づかへしつついでていぬ。
＜宇津保物語・忠こそ＞

。ここらの月頃、我は知らず顔に心解けて寝明かしにけんは・・・　＜狭衣物語・二＞

。ここらの日頃いも寝で仕うまつり慌てつる人々のうち休むべき、はたほけてのみ見ゆ。　＜栄花物語・二七＞

。かけまくもかしこき守殿（かうのとの）だにも、またこそ、ここらの年月比（ごろ）まだしか召さね。

。ここらの年比（としごろ）に、むばたまの夢ばかりだになくおぼほれて・・・　〈宇治拾遺物語・七ノ二〉
　　〈増鏡・序〉

以上、右に記した例などで判断すると、わずかに例外はあるが、「年月日」について言う場合、基本的には現在を起点とするところから、ココラを用いるのが普通だったものと思われる。

引き続いて、「年月日」以外の体言が格助詞ノの下に来るI－Bは、『源氏物語』でも、ココラとソコラに明確な使い分けが見られなかったが、他の作品でも同じことが言える。

。ここらの公人に見せて、恥を見せん。　〈竹取物語〉
。それが玉を取らむとて、そこらの人々の害せられなむとしけり。　〈竹取物語〉

。ここらの人さぶらへ。　〈宇津保物語・菊の宴〉
。そこらの人おどろくことかぎりなし。　〈宇津保物語・蔵開上〉

。ここらの僧どもの声を合せたる程、すべて物も聞えず。　〈栄花物語・二八〉
。御はてまで御念仏仕うまつるべく、そこらの僧どもによろづを掟てさせ給ふ。　〈栄花物語・一二〉

。やごとなき人のここらの使人に囲繞せられて入り給ふ有り。　〈発心集・補遺一〉
。そこらの橘、さながら同じ様になむありける。　〈発心集・八ノ八〉

ここにはとりあえず同一作品におけるI－Bの例を挙げてみたが、これらを見ても、ココラとソコラではその用法が似通っていることがわかる。なお、このI－Bは、中世以降ソコラを用いる方が多くなり、例えば『増鏡』では、五例すべてが「そこらの上達部」「そこらの武士ども」などと表現されている。また、ここに記したように、I－Bではコ

(ソ)コラの下の体言が「人」の場合が非常に多い。その他、『源氏物語』にも出て来たような抽象的事項や具象物、そして動物、場所などにかかる例も散見するが、この場合も特にココラとソココラでの使い分けは見られない。<注3>

三番目に、数のたくさんあることを表す動詞にかかって行くI－Cに関して見ることにしたい。I－Cの場合、『源氏物語』では、ココラが「思ヒアツム」「見アツム」など複合動詞化した他動詞にかかり、ソココラは単独の自動詞「ツドフ」にかかるという用法上の違いがあった。他の作品を見ると、総体的にこのI－Cの例は少ない。まず自動詞「ツドフ」にかかって行く例を見ると、やはり他の作品でも『源氏物語』と同じく、すべてソココラが使われている。

。そこらつどひたる大臣公卿「日本はいみじかりけり。かかる人のおはしけるよ」と・・<浜松中納言物語・一>

。院方にそこらつどひたるものども、ひとつ心に目をかためまもりまもりて・・・　<大鏡・道隆>

。中納言をはじめてそこらつどひたる者ども諸声に笑ふ。　<宇治拾遺物語・一ノ六>

。そこらつどひ集まれる者ども、ただあきれたるよりほかのことなし。　<増鏡・二>

次に、他動詞のアツムが下に来る例はわずかに『宇津保物語』に左の一例が見えるだけである。

。ここらめしあつめて、松の葉をも苔の衣をも、諸共にこそはと思ひ給てなん。　<宇津保物語・国譲下>

右は複合動詞の例で、しかもココラが用いられている点、『源氏物語』と同じである。先にも述べたが、結局、自分を中心としてそこに沢山集めるところから、他動詞の場合にはソココラではなくココラを使うのであろう。なお、この他動詞アツムの自動詞形アツマルも、『源氏物語』以外の他の作品ではよく用いられているが、それらは複合動詞として使われることもあり、また上に来る副詞はココラ・ソココラ両方の場合がある。

。かかる人のはらに、ここらむまれあつまりたまはましやと・・・　<宇津保物語・国譲下>

。その宮の辺の人にえ会ひはべらぬが口惜しさに、ここら集りたまへる中にもしおはしますやらむと思う給へて・・

。ここら集まりし人涙を流しつつ尊みあへる程に・・・　　＜大鏡・道長上＞
。結縁セントテココラアツマリ、ヒサメキテオガマントイヘバ・・・　　＜発心集・八ノ三＞
。何事も女房のなりなども人々そこらもて参り集まれば、善悪を人の聞ゆべきにあらず。　　＜沙石集・四＞
。他ノ犬ソコラ集マリ来タリテクヒ合ヒノノシリケレバ・・・　　＜栄花物語・四＞
。賀茂の祭の日、一条大路にそこら集りたる人、さながらともに仏とならむと誓はせたまひけむこそ、なほあさましく侍れ。　　＜今昔物語集・一九ノ三＞
。そこらあつまりたる大衆、異口同音にあめきて扇をひらきつかひたりけり。　　＜大鏡・師輔＞
　　＜宇治拾遺物語・五ノ二＞

右にココラ・ソコラ各四例ずつを挙げてみたが、どれも数量の多い意を示し、ココラとソコラに特別な使い分けは認められない。ただ、あえて言えば、何か仏教関係の行事などで人が大勢集まる場合にはココラを用いていたのかもしれない。その理由の一は、ココラ・ソコラの両方の例が見られる『大鏡』で、いずれも人数の多さを言いながら、ココラの方は雲林院の菩提講、つまり法会に集まった人々を対象としているからである。二つ目の理由として、仏教説話集である『発心集』と『沙石集』には、ココラしか用いられていないことが挙げられる。仏教関係の集まりというと、集まった人たちに他人を排斥したウチの世界、要するに身内意識が働いているとは考えられないだろうか。その他、このI－Cに含まれるものとして、下に動詞ミツ（満）が来たり、（『栄花物語』『増鏡』）、コム（込）が来る例（『栄花物語』）があるが、これらにはソコラがかかっている。おそらく普通に不特定多数の人が集合している時には、ソコラを使ったものであろう。なお、ムラガル（群）にかかる例も一つ出て来るが、これは『沙石集』の例なので、やはり使われている副詞はソコラではなくココラである。

引き続いて、数の多いことを言うIグループの最後Dの例を見ることにする。ここでもひとまず、同一作品でココラ・ソコラの二つが使われた例を挙げてみる。＜注4＞

。月ごろは絶えてここら言ひつくすこたへ、夢のうちにも聞かせざりつるを・・・　　＜浜松中納言物語・五＞

。思ひ出よそこらちぎりし言の葉をいかに忘れてそむきぬる世ぞ　＜浜松中納言物語・二＞

。ここら見る人の中にも、この御顔かたち・けはひ・有様に、ただ夢ばかりにても・・・　＜狭衣物語・四＞

。そこらいしいしと聞ゆる人々、御答へはなくて・・・　＜狭衣物語・一＞

。ここら候ふ御いのりの僧なども、その辺りの家どもの程広きに押し入る様にて混み居たり。＜栄花物語・二八＞

。月頃とのの内にそこら候ひつる僧はさらなり、いはず。　＜栄花物語・八＞

右のうち、『浜松中納言物語』の例は「ことたへ」「言の葉」という抽象的な事柄、そして『狭衣物語』と『栄花物語』の例は「人」について言っているが、ココラとソコラの用法はよく似ている。その他、このI－Dに分類出来る用例には「年月日」や「場所」を言うものが出て来るが、ココラとソコラで何か使い分けているようには思われない。『源氏物語』の場合には、ココラが来ると、必ず動詞「見る」を伴って、自分がかって接して来た「人」（特定の女性）について言い、ソコラは自分とは無関係な多くの人々を指していた。しかし、他の作品では特にそういう使い分けが見られない。ただ、同じ数の多さを言うのに、自分とのより強い緊密感がある場合には、同一領域の人（または物）という意識から、ココラを用いる方が本来的であったような気がする。したがって、『源氏物語』の用法は、まさに言語感覚に鋭い紫式部ならではのものであったと言えるかもしれない。

最後に、「程度のはなはだしさ」を言うIIの用法について述べることにしたい。この例もI－Cと同様、総じて用例数はあまり多くない。まず、『源氏物語』にも出て来た形容詞や形容動詞が下に来る例から見ることにする。意外なことに、他の作品では、形容動詞が下に来るものは一例も使われていず、形容詞の例も左記のように非常に少ない。

。ここらはげしき道をうちこえて深き山のおくにうとましき獣の充ち充ちたる中を・・・　＜宇津保物語・俊陰＞

。そこらかしこきものども、かんがへ申したるに・・・　＜浜松中納言物語・一＞

。そこら多かる宮の中の人々、泣きあひたるさま・・・　＜狭衣物語・二＞

。かくさまざまにめでたきことども、あはれにもそこら多く見聞きはべれど・・・　＜大鏡・道長下＞
。この君はありつるよりも小さくおはするに、折れかへり舞ふ程、そこら広き庭に人と見え給はで、変化（へんげ）のもののやうに見え給へば・・・　＜栄花物語・三〇＞

右の他に『栄花物語』には、ここに記したものと同じ形容詞「広し」にかかって行くソコラの例があと二つ出て来る。これらの例から判断すると、先に『源氏物語』で考察して来た場合と同じことが言える。すなわち、ソコラが「はげし」という、あまりよくない感じを与える語にかかって行くのに比べ、ココラのかかっている語は「かしこし」「多し」「広し」と、すべてプラスイメージのものばかりである。また、下に動詞が来る例には左のようなものが見られる。

。もみぢばのちりてつもれる我やどにたれをまつむしここらなくらん　＜古今和歌集・四・二〇三＞
。たちよれば梅の花がさにほふのもなほわび人はここらぬれけり　＜宇津保物語・春日詣＞
。［乳母達が］かたみに見れば、顔はそこらけさうじたりつれど、草の葉の色のやうにて、また赤くなりなど、さまざま汗水になりて見かはしたり。　＜大鏡・道長下＞

最初の『古今和歌集』の例は、類似のものがもう一つ同集に見える他、『後撰和歌集』でも同様の例が出て来る。歌意は「紅葉が散って積もっている私の宿に誰を待つといって、松虫がこんなにもしきりに鳴いているのであろうか」となり、「まつ」には「待つ」と「松虫」の「松」が掛かっている。常套的なわかり易い歌で、紅葉が積もっているのは訪れる人が誰もいない寂しい宿であることを意味し、そこに松虫がいつもにも増してしきりに鳴くのは、より寂寥感をあおることになり、副詞としてソコラではなくココラが使われているのは適切と言える。『宇津保物語』の歌の例でもひどく濡れた状態は決して気持ちのよいものではないので、ココラを用いていることは納得が行く。『大鏡』の例は部分的に「互いに顔を見合わせると、顔は精一杯化粧していたが、はやいまは草の葉のように青ざめており」と訳すことが出来る。お化粧するのはきれいになるごとで、決して暗い感じを漂わせるものではないから、その程度のはなはだしさを言うのにはソコラを用いる方がふさわしい。

他に、『源氏物語』の時に見て来た「思ひしづむ」にかかるココラの例と似たものが、左のように何例か見える。

。ここら思ひつもる事も言ひやるかたなく、むせかへるを・・・　〈夜の寝覚・一〉
。ここら思ひ忍びつる心の中を、ほのめかしては中々心騒ぎのみして・・・　〈狭衣物語・一〉
。ここら言はで過ごししは何にもあらざりけり。　〈狭衣物語・二〉
。ここら物をのみ思して、今年は卅七にぞならせ給ひにける。　〈増鏡・三〉
。ここら忍ぶるにあまりぬる程、ただ少しかくて胸をだにやすめ侍らんばかり・・・　〈増鏡・一一〉

右は順に「たくさん心に積もることも言い出すことができず」「今までじっとあれこれこらえていた心の中を」「胸に秘めていろいろと言わないで過ごして来たのは」「あれやこれやとひどく物思いばかりされて」「もうどうにも我慢することが出来なくなりましたので」と部分的に解釈することが出来る。つまりココラは「思ひつもる」「思ひ忍ぶ」「忍ぶ」など、自分一人でじっと内にこもって思ったり、我慢したりする意の動詞にかかっている。これは『源氏物語』で見て来た用法とほとんど同じで、自分中心のウチの世界のことについて言うため、当然ソコラではなくココラが使われていることになる。

以上、『源氏物語』以外の作品におけるココラとソコラの使い方の相違について述べて来たが、だいぶ紙数も多くなったので、この辺で章を改め、全体のまとめをすることにしたい。

## 四　おわりに

副詞のココラとソコラは、共に中古に入ってから、主として和文体の作品で盛んに使われるようになった語である。これらについて、まず『源氏物語』を中心に、どのように用いられているかについて調べ、それをもとに他の作品における用法についても考察を加えて来た。以下、その結果を箇条書きにしてまとめることにする。

① ココラとソコラがどのような種類の文に多く出て来るかを調べてみると、ココラは会話文、心内語、歌に多く

見え、ソコラは地の文でよく用いられるという傾向がうかがえる。

② ココラとソコラは意味的に似ていて、いずれも「I．量の多さ」「II．程度のはなはだしさ」を表している。さらに、Iの方は用法上、A～Dの四つに分けて考えられる。

③ I－Aは、下に格助詞ノと「年月日」に関する体言を伴うもので、この場合、大半の例にソコラではなく、ココラが使われている。

④ I－Bは、I－Aと同じ形式で、やはり下に格助詞ノと「年月日」以外の体言が来るものである。その体言は、「人」の場合が多いが、他に抽象的事項、具象物、動物、場所などの例も出て来る。そしてこの場合、上にココラが来ることもあれば、ソコラの時もある。

⑤ I－Cは、下に数の多さを表す動詞を伴うものを言う。この場合、他動詞のアツムが下に来ると、必ずココラが使われる。また自動詞としてはアツマル、ツドフ、コム、ミツ、ムラガルなどの例が出て来るが、かかって行く語は、ココラ・ソコラ両方の場合がある。ただ、不特定多数の人が集合している時には、ソコラを使う方が多かったようで、仏教的な集いなど、目的のはっきりした、範囲の狭い場合にはココラが用いられている。

⑥ I－Dは、IのA・B・C以外のものをまとめて一グループとしたものである。この場合、結局は「人」「年月日」「場所」その他抽象的な事柄について数の多さを述べていることになる。用例を見ると、ココラもソコラも用いられ、特に区別はないように見えるが、ただ、本来的には自分とのつながりがより強い場合には、ココラを使うべきものであったと思われる。

⑦ IIは、程度のはなはだしいことを言うもので、用例数はあまり多くない。用法的には、ココラもソコラもよく

似ていて、形容詞や形容動詞、もしくは動きの顕著でない動詞にかかって行く。ただし、形容詞、形容動詞の場合、ココラがどちらかというと、狭・少・低・小・暗などの感じがする語にかかるのに対し、ソコラは広・多・高・大・明をイメージする語にかかっている。また、動詞の中で「思ふ」「忍ぶ」など心中一人、じっと考えたり、耐えたりする意を示す語が来ると、必ずココラが使われている。

以上、これまで考察して来た結果を七項目にまとめてみた。結局、ココラとソコラという副詞は、意味・用法が非常によく似てはいるが、微妙な使い分けの認められる場合も出て来る。そして、その使い分けは、ココラが自分を中心としたウチの世界のことを言うのに対し、ソコラは、自分も相手も共通に知っている場面でのことを話題にするという点にしぼられると思う。つまり、ココラとソコラには、代名詞などに見られるコ系・ソ系の別が本来的に存していたのではないだろうか。それが時代と共に、意味・用法が類似しているところから混同して来たのであろう。さらに拍車をかけたのが、草体で書いた場合、ココラの「こ」とソコラの「そ」がよく似ていて、誤写の範囲内にあるという点も考えられる。最後に、ココラとソコラについて今まで調査して来たいくつかの作品における意味別用例数を一覧表にして示し、大方のご叱正を期待して筆をおくことにしたい。<注5>

| 作品名 | | ＩＡ | ＩＢ | ＩＣ | ＩＤ | Ⅱ | 計 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 竹取物語 | ココラ | 一 | 一 | 〇 | 二 | 〇 | 四 |
| 古今和歌集 | ココラ | 一 | 一 | 〇 | 〇 | 二 | 四 |

| 作品名 | | ＩＡ | ＩＢ | ＩＣ | ＩＤ | Ⅱ | 計 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 竹取物語 | ソコラ | 一 | 三 | 〇 | 〇 | 〇 | 四 |
| 古今和歌集 | ソコラ | 〇 | 〇 | 〇 | 〇 | 〇 | 〇 |

| 後撰和歌集 | 蜻蛉日記 | 宇津保物語 | 枕草子 | 源氏物語 | 紫式部日記 | 浜松中納言物語 | 夜の寝覚 | 更級日記 | 狭衣物語 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 0 | 一 | 一二 | 0 | 九 | 0 | 一 | 0 | 0 | 七 |
| 0 | 0 | 七 | 0 | 九 | 0 | 0 | 0 | 一 | 三 |
| 0 | 0 | 二 | 0 | 三 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 |
| 一 | 一 | 一0 | 一 | 一二 | 0 | 一 | 二 | 0 | 三 |
| 一 | 0 | 二 | 0 | 五 | 0 | 0 | 一 | 0 | 二 |
| 二 | 二 | 三三 | 一 | 三八 | 0 | 二 | 三 | 一 | 一五 |

| | | | | | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 一 | 一 | 0 | 0 |
| 0 | 一 | 一0 | 一 | 三 | 一二 | 二 | 0 | 二 | 一 |
| 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 三 | 0 | 一 | 0 | 0 |
| 0 | 0 | 二 | 0 | 五 | 一 | 0 | 二 | 一 | 一 |
| 0 | 0 | 0 | 0 | 六 | 0 | 0 | 一 | 0 | 一 |
| 0 | 三 | 一二 | 三 | 二六 | 三 | 五 | 三 | 一 | 三 |

| 増鏡 | 徒然草 | 沙石集 | 東関紀行 | 宇治拾遺物語 | 発心集 | 新古今和歌集 | 古本説話集 | 大鏡 | 今昔物語集 | 栄花物語 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 二 | 0 | 0 | 0 | 一 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 八 |
| 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 二 | 0 | 0 | 二 | 0 | 一七 |
| 0 | 0 | 二 | 0 | 0 | 五 | 0 | 0 | 一 | 0 | 0 |
| 0 | 一 | 0 | 0 | 0 | 一 | 一 | 0 | 0 | 0 | 六 |
| 二 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 |
| 四 | 一 | 二 | 0 | 一 | 八 | 一 | 0 | 三 | 0 | 三一 |

| | | | | | | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 |
| 五 | 0 | 0 | 一 | 一 | 一 | 0 | 一 | 三 | 0 | 三五 |
| 二 | 0 | 0 | 0 | 三 | 0 | 0 | 一 | 三 | 一 | 六 |
| 二 | 0 | 0 | 0 | 一 | 0 | 0 | 0 | 一 | 0 | 二 |
| 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 二 | 0 | 三 |
| 九 | 0 | 0 | 一 | 五 | 一 | 0 | 二 | 九 | 一 | 四六 |

<注1> 「真木柱」の「心苦しげなること」を伴う例には異文があり、保坂本、麥生本、阿里莫本、伝冷泉為相本ではソコラが使われていない。よって、これは確実な例とは言い難い。

<注2> 『新編国歌大観』の一及び二で調べてみたところ、左のような結果になった。

一　ココラ　十四例　　ソコラ　一例
二　ココラ　十四例　　ソコラ　三例

右の例は、用法的にはココラとソコラにほとんど変わりがない。よって、両語には、用例数の極端な違いのみが認められることになる。

<注3> 抽象的事項には「ならひ」（『宇津保物語』）と「願」「祈り」（『狭衣物語』）があり、いずれもココラが上に来ている。具象物のうち、「金」（『竹取物語』）にはソコラが、「宝」（『狭衣物語』）にはココラがかかっている。また、動物の例には、「燕」（『竹取物語』）と「毒虫」（『宇治拾遺物語』）があるが、両方とも上にはソコラが来ている。場所関係のものでは、御うぶ屋（『宇津保物語』）、「国々」（『更級日記』）にココラが、また、御庄・御牧（『増鏡』）にはソコラがかかっている。以上、ココラとソコラのかかり方に、特にこれと言った区別は見られない。

<注4> 『宇津保物語』にもココラ十例、ソコラ二例とI－Dの例が出て来るが、ソコラの方に異文があり、はっきりしないので、割愛した。

<注5> 今回の調査に当たっては、公刊の索引類を元に、おおむね岩波書店発行の日本古典文学大系本を底本とした。なお、歌は『新編国歌大観』によった。